

発表要旨集

Abstracts

【研究報告】

1. 田辺 和子（愛知学院大学非常勤講師）

タイ仏教寺院のウポーサタ堂について

現在のタイ寺院において重要な仏教行事の行われるウポーサタ（布薩）堂の結界の様子、お堂の荘厳の様子（ワット・ポー中心）、そこに集会する比丘僧達の様子と在俗信者達の様相を報告発表する。昨年雨安居中9月のウポーサタの日に訪問した、タイのタムユット派の本山、第一級王室寺院ワット・ボヴォラニヴェー寺院の波羅提木叉誦出会の様子を報告すると同時に、マハーニカイ派の第一級王室寺院ワット・ポーのウポーサタ堂の荘厳の様相の詳細を報告して、チャクリー王朝の建国理念を探ってみたいと思う。

【研究発表】

2. 古川 洋平（（公財）東洋哲学研究所研究員）

パーリ文献中の *saddhādhimutta* について

——修道論上の信の位置付けの視点から——

サンスクリット語 *adhi-√muc* 由来の語 (A) は、パーリ聖典の段階から同じく *śrad-√dhā* 由来の語 (Ś) と併用され、Ś と同様に「信」を表す語と理解されてきた。また、伝統的な信の定義的用例においては、A が Ś の特徴（附帯する様相等）を示すという側面も認められる。本発表では、Ś の類義語と共に Ś の特徴を示す語でもある A に注目し、特に仏弟子に使用される *saddhādhimutta*（信について信解した者）の意味について若干考察を加えていく。

3. Watawala Gamage Indunil Philip Shantha

(Zhejiang University, Postdoctoral Researcher)

The Ideal of Bodhisattva Rooted in Theravāda Buddhism and Common Characteristics with Mahāyāna

It is the popular belief that the ideal of bodhisattva is belongs to Mahāyāna Buddhism, and in fact it's a phrase of follower's of Mahāyāna Buddhism. There are a few scholarly attentions to the Theravāda tradition to investigate bodhisattva concept while it's one of the main researches of the scholars who work on Mahāyāna tradition. Here my attempt is to explore the bodhisattva ideal in the Theravāda tradition as a common character within both traditions. It seems that was misunderstood by later interpretations, as Theravāda knows nothing about the vehicle of bodhisattva. Theravāda emphasize to become an *arahant* while that of the Mahāyāna wish is to become a bodhisattva and

finally to attain the state of a Buddha. Here fact is that these two traditions are unanimously acknowledged to have bodhisattvas. In other word Mahāyāna also recognized that *pāramitās* are compulsory to fulfill the qualities to become the Buddha. Therefore the bodhisattva concept is belong to Mahāyāna is erroneous. Buddha, *paccekkhabuddha*, and *aranhant* are the aspirations in the Theravāda Buddhist tradition, endeavor to achieve as the capacity by practicing *pāramitās*.

4. 伊藤 千賀子（元早稲田大学非常勤講師）

クシャ・ジャータカにおける宝珠と王法と仏法

Jātaka 531 *Kusa-jātaka* は、結婚直後に王子の醜さに驚いて逃げ出した王女を王子が追いかけて、再び一緒になるというストーリーである。ここには、王子の出生の不思議、結婚、逃げた花嫁へのアプローチ、戦闘、因果応報、これらすべてを包含して輪廻思想が説かれており、ジャータカの中でも最も興味深いもののひとつである。所伝の最後のモチーフは醜い王子が美しくなることである。その手段として、取り上げた8所伝のうち7所伝が帝釈天から与えられた宝珠を頭にのせることであるが、1所伝だけ、手段が宝珠でないものがある。発表者は以前にこの所伝の展開と変容について発表した。その際は、宝珠を必要としない意味が解明できなかった。そこで、本発表では、その点を編訳者などの思想から考察していく。

5. 和田 理寛（神田外語大学講師）

中部タイにおけるモン（Mon）系タンマユット僧団の変遷と宗派的特徴 ——19世紀末から現在まで——

19世紀末、中部タイと下ビルマに成立したモン系タンマユットという少数民族の僧団について、これまで学界はほとんど注目してこなかった。本発表は、タイ国の同僧団について、宗派（ニカーヤ）として公認されていないにも関わらず、20世紀を通して、他の僧とは出家式や羯磨を共に行わない点で独立した宗派としての性格を維持してきたことを明らかにする。また、こうした宗派的特徴は自己浄化以外に民族語の差異によっても生じうること、および、同僧団はこの2つの方向性を併せ持つことを指摘し、上座部の宗派理解に貢献したい。

6. 飯國 有佳子（大東文化大学国際関係学部准教授）

「見えないもの」の捉え方

——現代ミャンマーにおける靈的存在をめぐる実践についての考察——

ミャンマーの上座部仏教徒社会に関する人類学的研究では、ナツやウェイザーといった様々な靈的存在とそれにまつわる実践が多く報告されているが、本発表では主に、上記とは異なるカテゴリーに分類される靈的存在とそれに関連する実践に着目する。それにより、現代ミャンマーの仏教実践の一側面を明らかにしながら、仏教研究に求められる新たな視座について考えてみたい。